

教師の熱き思いは
必ず子どもの内面に結実する



名古屋道德教育研究会会長
南陽小学校長 村上 立博

3月に入って卒業間近の6年生に、私の最後の指導としての道徳の授業を行いました。指導内容項目は1-(3)「生命の尊重」です。メインとなる資料は、詩「生ましめんかな」

(栗原貞子；原爆投下により瀕死の重傷を負った老産婆が死臭の漂う瓦礫の下で産気づいた若い妊婦から赤子を取りあげ、生を与えて息絶えるという鮮烈な内容)。補助資料は自作「生きた証Ⅰ・Ⅱ」(何の変哲もない一人の人間にも、生きたという尊い足跡があり、それを語り継ぐためにも今を生きていくことの大切さを訴える内容)。生きていることそれ自体が尊く、自分の生きた証を刻みつけるような生き方をしてほしいと願った授業でした。

授業での子どもの反応は、「人間は死ぬために生まれてきたのではない！生きるために生まれてきたんだと思いました」「生きていることがとてもすごい(大切な)ことなんだと実感し、命を大切にしなければと思った」「ぼくはたまに『自分なんて』と思うことがあります。だけど校長先生の授業でがんばろうと思いました。ありがとうございます」などとあり、私の熱い思いを十分に受け止めてくれました。

次の日、児童会の役員でも何でもない6年生の男子3名が校長室にきました。前週の東日本大震災で多くの命が奪われ、多数の避難者が困窮していることに居ても立ってもいられなくなったので、自分たちにできることはないか真剣に考え合いました。「義援金を募り、尊い命を守ろう」との結論に達し、その許可を求めにきました。「君たちはすごいなあ」と言葉を掛けると、思いを理解してもらったことがうれしかったので、全員目に涙を浮かべ、その表情が輝きました。

翌日朝、緊急全校集会を開き、有志と児童会役員が必死に訴えました。6年生の殆ど全員が募金活動の先頭に立ちたいと希望しました。この提案は児童会のみならず、職員・PTAを巻きこんで瞬時に大きな波となり、思いがけぬ空前絶後の多額の義援金が集まりました。子どもたちは「そうせざるにはいられない」という人間としての内面を根ざした思いを生き方にまで昇華させ、道徳実践として結実させたのです。

植え付けたよき種は、間違いなくよき果実として実っていきます。私たちの教育的営みは、迂遠のようには見えませんが、このことを確信して、さらに励んでいこうではありませんか。

名道研だより

第28号

発行

平成23年6月27日

名古屋道德教育研究会

広報部

心輝け 子どもたち!

新年度の研究部会の活動が始まりました。

授業づくり研究部会

指導方法の工夫を生かした道徳の授業づくり

—子どもの気づきを広げるために—

本年度は、「発問」「話し合い」「板書」などを工夫し、子どもの気づきを広げられる指導方法について学んでいきます。ご参加をお待ちしています!

7月15日(金)18:00~ 教育館
話し合いの工夫を生かした授業づくり

9月5日(月)18:00~ 教育館
授業研究の模擬授業その1

8月23日(火)18:00~ 教育館
板書の工夫を生かした授業づくり

9月28日(水)18:00~ 教育館
授業研究の模擬授業その2

詳細は、部長 加藤 兼幸(吉根小)まで!

テーマ研究部会

「道徳の時間」を要とする道徳教育の工夫

—「関連プログラム」づくりを通して—

昨年度、各教科等の学習や体験活動における道徳教育と、道徳の時間とを意図的に関連させる「関連プログラム」が有効であることが分かりました。

今年度は、様々な主題で「関連プログラム」を構成し、指導の効果をさらに高めるべく追究していきます。ご参加をお待ちしています!

詳細は、部長 平子 晶規(滝川小)まで!

☆部会開催日程☆

7月15日(金)18:00~ 教育館
「関連プログラム」の検討Ⅱ / 授業実践報告Ⅰ

8月25日(木)14:00~ 教育館8研
「夏季道徳講座」



9月5日(月)18:00~ 教育館
「関連プログラム」の模擬授業Ⅰ

9月28日(水)18:00~ 教育館
「関連プログラム」の検討Ⅲ

「道徳」は難しく、
キライですか?

名古屋市道徳研究会委員長
天白養護学校 加藤 英樹



「道徳」と聞くと、堅い(また、どこか暗い)イメージがあることはぬぐえないものであると思います。しかし、人が人らしく生きていくこと、その方向性を導

いていくものが道徳教育であると考えれば、教師である皆さんは、必ず日々道徳教育に取り組んでおられるのではないのでしょうか。

道徳教育・道徳の時間の指導の研究(以後「道徳の研究」)はとても奥が深く、どこまで学んでも「まだまだ、新しい発見がある!」と感じます。委員長という任をいただきましても、当然ですが勉強することばかりで、「自分はまだ道徳の研究において発展上人だなあ。」とつくづく思います。

私自身まだまだ未熟ですが、道徳の研究を進めていることで、無意識のうちに子どもとのかかわり方が向上していると実感しています。それは、道徳教育が子どもとのかかわりがなければ成り立たないからです。「どんな発問をすると、子どもが多様に考えるだろう。」「どんな指導をすると、子どもが自分の生き方を考えられるだろう。」などと考えて授業に臨みます。このように、単純に「授業を成立させよう」と考えるだけでも、子どもへのかかわり方や学級経営の在り方が、少しずつ変わってきました。

「子どもたちの心を育てつつ、教師としての力量の向上を図りたい。」私はそういう気持ちで日々過ごしています。そして、そういう仲間が集まっているのが名古屋市道徳研究会だと思っています。「道徳」を難しく考えず、また、「スキ」とか「キライ」といった言葉で割り切らず、気軽に研究部会に参加していただける方が増えることを期待しています。